

京都産業大学 ことばの科学研究センター 第 3 回研究会

日時：2026 年 9 月 30 日（水）14:00～16:00

会場：4 号館 2 階総合学術研究所会議室

ポライトネスの観点からの ロシア語形容詞の長短語尾形の分析 北上 光志（ことばの科学研究センター研究員・外国語学部教授）

ロシア語の形容詞には、形態的に長語尾形と短語尾形が存在する。長語尾形は名詞修飾語および述語として用いられるのに対し、短語尾形は述語としてのみ機能する。したがって、両形に共通する機能は述語用法である。述語として用いられる長語尾形と短語尾形の使い分けについては古くから研究が行われてきたが、いまだ決定的な定説はない。伝統文法ではしばしば「恒常的特徴」と「一時的状態」の対立によって説明される。しかし近年の研究では、この説明だけでは捉えきれない実例が多数報告されており、意味論・統語論・コーパス言語学などの観点から再検討が進められているものの、統一的な見解には至っていない。本発表では、従来の研究では十分に指摘されてこなかったポライトネスの観点から、形容詞の長語尾形と短語尾形の差異に着目する。そして、両形の使い分けにどのような要因が反映されているのかを明らかにすることを目的とする。

アンドレ・ブルトン『シュルレアリスムと絵画』（1928） における動きだすイメージ 長谷川 晶子（ことばの科学研究センター研究員・外国語学部准教授）

アンドレ・ブルトンは、シュルレアリスム運動を代表する詩人・批評家である。この運動の造形芸術における指標を示す『シュルレアリスムと絵画』（1928 年刊）では、絵画や写真の固定したイメージが運動に関連することばで語られ、独自の生命を得て変容するものとして描写される。なぜブルトンは静的なイメージを動的なものとして捉えるのか。本発表では、テキストに現れるイメージの生成や変容を示す表現を精査し、ブルトンがイメージに自律性を認めていたことを示す。続いて、当時発展を遂げていた映画との連関を検討する。以上を通じて、ブルトンが絵画をイメージが生成し変容する場として提示した理由を明らかにしていきたい。